

I 種苗生産

昭和59-63年度の5年間に約60区の飼育を行なった。昭和59年度は1m³ポリカーボネイト水槽が中心で、以後は大型水槽（45m³上屋付屋外水槽及び50m³屋内水槽）を使用して飼育を行なった。

5年間で約39万尾を生産したが年度によって更に区分によってバラツキが激しく安定生産とは言えないのが現状である。

かねてからの課題であった初期大量減耗の対策についてはワムシに餌付くまでの適正初期餌量探索を主に種々の飼育を試みた。ここで図1に大型水槽を使用した飼育例で水温別に初期餌料としてマガキ幼生を使用した区とそれ以外を使用した区の初期（日令 10-14）生残率を示した。これによると水温では24°Cを越えたあたりから生残率は向上し、またマガキ幼生を使用した区はそれ以外に比べ若干生残率の向上が認められる。また昭和62年度後半から行なった大量卵収容法はハマフエフキの様な初期生残率の低い魚種には有効な方法と考えられる。

以後の飼育については、全長 8mm前後での減耗と全長10mm以後の共食いが問題であった。前者は栄養強化したアルテミアを投与することにより減耗を抑えることができ問題解決の糸口がつかめた。後者については餌量及び投与量について検討する必要がある。

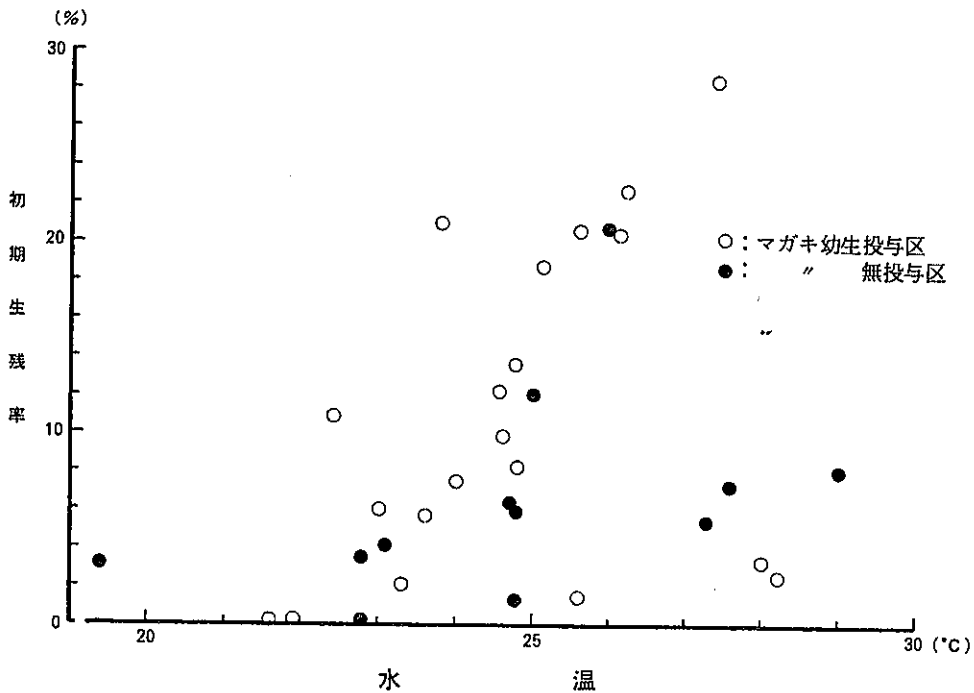


図1 餌料別・水温別初期生残率（1985～1988）